



# 「女人禁制」本当に伝統なのか

世界には、女人禁制の聖地が多々あります。日本でも長らく、霊山や寺社に女性が入ることが禁じられてきました。出産や月経の血をケガレとして避ける風習や、修行の妨げになるといふ仏教戒律が結びつき、10世紀ごろに恒常的な「女人結界」が成立したと考えられています。

1872年の明治政府の布告で公には禁制は解かれました。しかし今も女人結界を続ける霊場は残ります。修験道の聖地である大峯山の山上ヶ岳(奈良県)は、2004年に一帯が世界遺産に登録される際、人権の観点から禁制解除を求める1万人以上の署名を市民団体が提出しましたが、議論は進んでいません。

逆に文化庁は20年、明治後半まで禁制が続いた高野山の外にあった女人堂などを「女人高野」として日本遺産に認定しました。「時を超え、

## 宗教学者 小林 奈央子さん

1973年生まれ。愛知学院大教授。著書に「木曾御嶽信仰とアジアの憑霊文化」「宗教とジェンダーのポリティクス」(いずれも共著)など。

時に合わせて女性とともに今に息づき」というストーリーと共に。結界外で祈ることしか許されなかった女性の歴史がロマン化され、観光に利用されることに、違和感を覚えます。宗教は、信じ救われた人がいる以上、「差別か伝統か」と二分できない面が確かにある。でもその「伝統」は宗教的意味があるのか、本当に伝統なのか、問う必要があります。

御嶽山にはかつて、女性の「強力」(荷運び)がいました。火口湖「三ノ池」は神聖な場所として女性が排除されていたのに、強力たちは、その御神水を登山客のためにくみに行かされていた。宗教的伝統で不変とされてきたタブーが、世俗的理由で簡単に不問になるといふことです。

この問題を巡っては「関係者で議論を重ねて」といった主張をよく耳にします。でもその場を設ける既得権を有するのは、一貫して男性でした。禁制を続けるかやめるか、その「主語」は、今なお男性なのです。そのこと自体を問い直さない限り、真の「議論」は進まないでしょう。

(聞き手・石川智也)

次回から「集まれば」をリレーします。